

大西さんは、1987年の4月、私がD2になるときにM1として京大核理論研究室に入ってきました。大西さんと同期の菅沼さん、福井さんを含め、この3人はそれぞれに特徴のある異色の存在でした。その頃、京都の宝ヶ池で開催されたPANIC国際会議と基研で開催された湯川セミナーに参加するため、W. Weise氏が日本に滞在されていました。当時、研究室をまとめておられた玉垣教授は、研究室のサブグループであるHigh-Densityセミナーに属する院生と大西さん達3人を引き連れ、哲学の道を散歩しながらWeise氏に3人を”フレッシュマン”として紹介していたことを思い出します。

大西さんの研究は、輸送方程式による重イオン衝突現象の解明に始まり、今では高エネルギー重イオン衝突による高温・高密度物質や中性子星内部の高密度物質を対象とする、クォーク・ハドロン物理にまで広がっています。特に、最近のfemtoscopyに関する仕事は、実験グループとの協力による理論・実験両面からの総合的な検討を通して可能になると思われ、このことは彼の幅広い視野と旺盛な好奇心の強さを反映していると同時に、彼が実験家との間で協力関係を築くことができる希有な存在であったことを表していると思います。

私が大西さんとの会話の中で特に覚えていることの一つは、十数年前のある研究会で、私が中間子凝縮をテーマに講演したときでした。私は時間の制約もあって専らK中間子凝縮に関わる話をしました。当時、酒井さんらによるガモフ・テラー巨大共鳴実験の解析から、 π 中間子凝縮の存否に重要なスピン・アイソスピンチャンネルの短距離相関の強さに関する最新の情報が得られつつある状況でした。すると彼は私の講演後の質疑応答のときに「なぜいま、新しい実験情報に基づいて π 凝縮について追究しないのですか」という趣旨の質問をしました。 π 凝縮自体は、1970年代から80年代にかけて、理論・実験面から議論され尽くした感があったのですが、この質問は、彼が常に新たな視点からいろいろな現象に関心を持ち続けていたということの表れだと思えます。

もう一つは、これも7、8年前の余り最近の話ではないのですが、私が基研で行われた研究会で講演したときのことで。普段は余り彼と会話を交わすことはなかったのですが、そのときの彼は休憩時間の際に「さっきの話は初めて聞いたのですが、今までに話したことはなかったでしょうか」と聞いてきました。実はそれより以前の物理学会で同じ内容の講演をしたことがあるので、そのように伝え、「じゃあ、そのとき自分はその物理学会のセッションにいなかったのでしょうか」という返事が返ってきました。私はそのとき、大西さんは私の研究にも興味のアンテナを向けていたのかなと、内心少しうれしく感じました。

去年の1月頃にオンラインで開催された研究会で大西さんが講演していました。そのとき、彼のひどくやつれた顔を見て、私は思わず「一体どうしたの？」とパソコンの画面越しに心の中で叫んでいました。その後、3月頃に開催された別のオンラインの国際シンポジウムで、私が大西さんの共同研究者（神野さん？）に講演後の質問をした際、大西さんが補足のコメントをしてくれました。そのとき私は（英語の講演のため）形式的にThank you. と返しただけでしたが、それが大西さんと交わした最後の言葉になってしまいました。

「ありがとう。」今は心からそのようにいいたいと思います。常に核物理分野の先端に立ち、研究を推進されてきたことに敬意を表して。そして私自身の研究にも関心を持ち続けてくれたことに対して。